



壁の目

湯殿の壁に目が生えた。

埋もれたとも言い換えられるかもしれない。

ともかくにも目がいたのだ。ぱち、と瞬く目は私を見ているのだろうか。

私は体を洗うのをやめ、目を見つめた。目はぱちぱちと瞬きを繰り返すが、何も言わない。それもそう  
だ。目なのだから。

「これ、目」

呼びかけると、目は瞬いた。

しかし呼びかけたものの、特に用事は無い。幾分据わりの悪い心地がしたが、まあ良い。私は再度体を  
洗い始めた。

その様子を、目はじっと見ている。

何だか妙な気分を覚える。目は私の全てを見ているのに、私は目の目しか見られないのだ。

目の他の部位は壁の向こう側にあるのだろうか。それとも、目には目しかないのだろうか。

考えたところで確かめる術は無い。壁を取り壊すと湯殿が使えなくなってしまう。それは困りものだ。

それにしても目は私の何が面白いのだろうか。じっと注がれる視線は痛いほどだ。

「これ、目」

ぱち、と返事をするように目は瞬く。

「無遠慮であろうよ」

何しろ、私は一物から何から晒しているのだ。目は目しか晒していないというのに。

すると目は笑うように、三日月の形にすうと曲がった。

私は苛立ちのようなものを感じた。

突いてやれば良いのかもしれないが、それは少し可愛そうな気もする。それに私は血に弱いのだ。目か  
ら垂れ流れる血を見ようものならすぐさま倒れて、家中の者に無様な姿を晒してしまうだろう。

だから私は、白目をつるりと指先でたどった。

目はこそばゆいのか、黒目をぐるぐるさせている。時折黒目が指先に触れるのだが、そのどちらもぬる  
ぬるとしていて、私は奇妙な心地を覚えてしまう。

「これ、目」

大人しくなさい。

告げて、指を離す。

白目には赤く、細く、血の管が走っていて、なるほど目の血の色も私と同じなのかと、そんな事を考えた。

目は素直に私の言葉に従い、大人しく、じっと私を見ている。

私は唇を弓なりに曲げた。

「これ、目」

壁に手をつき、私は目に唇を寄せた。

「大人しく、しているのだぞ」

舌先を伸ばし、ぬるついた目をなぞる。目は私の言葉に従って大人しくしているようだ。

舌に感じた味は塩っ辛く、なるほど目の涙も私と同じ味なのかと、そんな事を考えた。